



矢巾キャンパスの桜

主な内容

巻頭言——全学教育推進機構長就任挨拶

機構長・医学教育学講座 教授 佐藤洋一

特集——附属病院移転事業の基本計画について

総合移転計画事務室

トピックス——第1回ビブリオ・バトル in 岩手医大が行われました

《平成26年度予算》

全学教育推進機構長就任挨拶

機構長

佐藤 洋一

(医学教育学講座 教授)



岩手医科大学全学教育推進機構と名付けられた部門が、平成26年4月1日に立ち上がりました。本機構は、各学部の教務委員会の情報共有の場であった全学教育運営委員会をもとに、「大学の教育戦略を企画・実行する部署」として新たに立ち上げられました。その中には、従来の共通教育センター（以前の教養部）機能を持った教養教育センターを包括しております。文言的には「教育戦略部署」ということですが、その機構がどのようなミッションを有して、具体的にどういった働きをするものなのか、機構長である私自身も確固たるものがあるわけではありませんでした。今回の学内報で紹介する機会を得たことから、改めて本機構の意義と活動方針を考えてみました。

全学教育推進機構のミッションは、端的に言えば、文部科学省と厚生労働省の縦割り行政の狭間に位置する医療教育の現場で、教員と学生が翻弄されないような対処案を考えること、だと思います。現在、問題になっていることを整理してみると、当面は、

- 1) 学生支援と教育戦略立案のための情報収集と解析
- 2) 分野別認証評価への対処
- 3) 教育資産の有効利用と教育力の向上

の3点に絞りこんで、仕事をしていくのがよかろうと思っています。

これまでは、学生の皆さんの指導にあたっては関係各部署がそれぞれ熱心に取り組んでこられました。が、残念なことにそれらの情報が共有されて参りませんでした。学生支援のさらなる充実のため、多岐にわたる学生情報（成績や学生生活、面談記録等）の集積と解析する部署（Institutional Research; IR）が必要になっています。IRは文部科学省からも設置が求められていることから、今後は本機構がIRの一端を担う

ことになるでしょう。個々の学生情報の一部は、担任やチューターへ呈示して、個別指導に利用して貰うように整備する予定です。

文部科学省の施策誘導で、日本の大学の各学部は領域別の国際的レベルの認証評価を受けなければならなくなりました。点数を付けられますので、もしそれが公表された場合は大学の序列化に使われる可能性があります。医学部、歯学部そして薬学部のいずれも、プロフェッショナルリズム教育と多職種連携教育(Inter-Professional Education, IPE)、能動学修(Active learning)、シミュレーション教育と実社会における実習などを体系的にカリキュラムに入れ込まないと、それぞれの領域別認証評価で良い点を貰えないでしょう。かなり綿密に認証評価対策を練ることになります。

前述のような教育プログラムでは、少人数グループの部屋や高価な教育機材の設置、自学自修のスペースなどが必要になります。矢巾キャンパスでは、部屋や機材はできるだけ共有化し、ラーニング・コモンズを設置するなどして教育の効率化を図らなければなりません。また教員の教育力向上のための研修会を体系的に開催することで、授業や実習のレベルアップを達成できると思われますが、それと並行して大学外で指導にあたる医師・歯科医師・薬剤師向けの教員研修会も用意することになるでしょう。

大学全入時代で本学が生き残るためには、前述の施策は重要案件となっています。評価のための対処と考えると心も萎えがちですが、こうした作業を通じて学生教育の質が向上し一人でも多くの学生が国家試験に合格して「誠の医療人」へと成長することは、学祖三田俊次郎から綿々と受け継がれる本学教職員の願いと存じます。本学の医学教育の原点に立ち返って、教育戦略を考えていきたいと思っています。諸先生の忌憚の無いご意見を機構にお寄せ頂ければ幸甚に存じます。

附属病院移転事業の基本計画について

総合移転計画事務室

平成26年4月開催の理事会において、創立120周年記念事業の実施が決定され、本附属病院移転事業も記念事業の一環として組み込まれる形となりました。記念事業の概要につきましては、5月16日に発行された学報号外に詳しく掲載されておりますが、平成29年の創立120周年記念式典、平成31年の矢巾新病院開院など、更なる一大プロジェクトとして本事業を進めていく形となります。

現在、附属病院移転事業については、各委員会やワーキンググループでの協議検討を進めておりますが、各々の詳細については、関係各部署とも個別に打合せをさせていただきながら、基本計画及び基本設計の枠組みを固めている段階にありますので、その進捗状況についてご報告いたします。

今回の附属病院移転に係る大学基本方針については、平成26年3月28日に歯学部講堂で開催した説明会において小川理事長よりお話しいただいているところでありますが、基本方針として、矢巾地区には高度治療・入院機能を持つ1,000床規模の特定機能病院を整備し、内丸地区には高度外来機能を中心とした内丸メディカルセンター（仮称）（以下、仮称省略）を整備する計画としています。

今回、矢巾新病院の機能整備検討に当たっては、少子

高齢化による社会構造の変化や、国の医療政策の動向も注視しながら、岩手県の中核病院としての位置付けとしてだけではなく、将来的に北東北・北海道を視野に入れた三次医療の拠点エリアとして、矢巾地区を形成していくことを念頭に、以下の機能整備や機能拡充について検討を行っております。

- ▶小児・周産期、救急部門の機能強化（⇒統合医療センター（仮称）の整備）
- ▶三大疾病センター（がんセンター、心臓センター、脳卒中センター）の設置
- ▶内科・外科を連携させた病棟の臓器別センター化
- ▶放射線診断・治療部門、中央検査部門の機能充実、中央手術部門（最大24室）、集中治療部門（最大78床：ICU/CCU/HCU 58床、EHCU 20床）の拡充
- ▶緩和ケア病棟、回復期・リハビリテーション病棟、療養・在宅医療の整備検討

また、上記の集中治療部門の拡充や緩和ケア、回復期・リハビリテーションの新規病棟設置と併せ、病床数については、国庫補助金の活用要件（10%以上の削減）により、現行の1,166床から1,000床規模に減床を行わなければならないことから、必然的に圧縮される病床数の中

内丸メディカルセンター（仮称）の基本方針

- ・ 患者さんの利便性を重視した**高度外来機能**
⇒日帰り又は短期入院での迅速な検査・診断
⇒必要に応じ矢巾に搬送
⇒盛岡市、医師会と連携し1次・2次救急対応を検討中
- ・ 病床数は50床～100床規模
- ・ 歯科医療センターを併設
- ・ 面積は約3万5千㎡（内、新棟約1万5千㎡）

矢巾新附属病院の基本方針

- ・ 特定機能病院、病床数1,000床規模
- ・ 面積は内丸現有建物（医学部）と同規模（約8万㎡）
- ・ 治療、手術、入院を中心とした機能
⇒高度外来機能中心の内丸との機能分化
- ・ 小児・周産期、救急部門の機能強化
⇒統合医療センター（仮称）整備
- ・ 平成31年度内開院目標

で、在院日数の短縮やベッド稼働の効率性を高めるべく、ベッドコントロールについては専任看護師を配置して中央管理していくなどの検討も進めております。

建物設計については、「患者さんにやさしい病院、スタッフが働きやすい病院、変化と成長に対応できる病院づくり」を基本コンセプトに置き、外来・検査部門はワンフロアに集約し、患者さんに分かりやすい動線に配慮するとともに、内部構造については出来る限り構造壁を造らず、いつでも変更可能な設計とし、将来的な医学・医療の変化に柔軟に対応出来るよう機能性と拡張性を持たせた構造・配置計画としております。

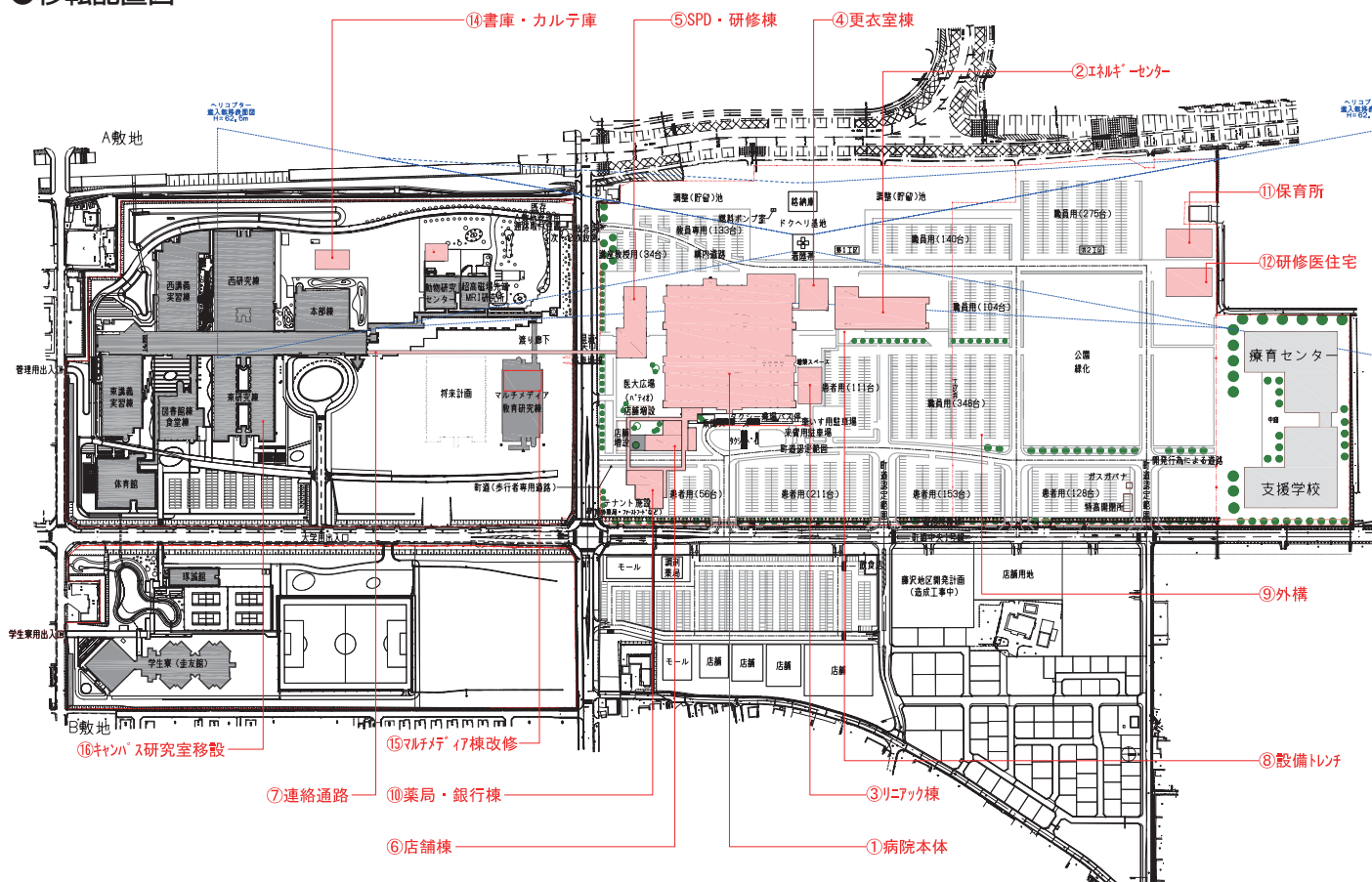
現段階でのフロア構成としては、地下1階：給食部門、廃棄物、1階～2階：外来部門と救急、放射線・中央臨床検査部門を集約、3階：手術部門・集中治療室、リハビリ・透析、4階：ISS（機械室）、5階～11階：一般・特殊病棟、12階：緩和ケア病棟とし、西側の建物には救急科や小児・周産期等の統合医療センター機能をまとめ、東側の建物には一般病棟を配置しております（※別図参照）。一般病棟については1看護50床を基準としてワンフロアに2病棟を配置。各病棟に医局やカンファランス等を隣接させ、医師・スタッフの動線や診療環境に配慮した設計としております。

また、現在、新エネルギー導入促進協議会（経済産業省）

の補助金を活用し、新病院に隣接してエネルギーセンターを先行整備する計画を進めており、太陽光発電・地中熱利用設備などの環境にやさしい再生可能エネルギーや高効率コージェネレーションシステムの導入等による自立供給を目的とした分散型エネルギーシステムを構築し、災害拠点病院として常に安定したエネルギー供給体制を確保するとともに、災害等でエネルギー供給がストップした場合においても、3日間程度のエネルギーを供給出来る容量と、避難所施設としての機能を併せもったエネルギーセンターを整備する計画としています。

次に、内丸地区については、盛岡市中心部の利便性を最大限に活かし、患者さんがアクセスしやすい窓口として、外来機能を充実させたメディカルセンターの整備を行う計画としています。ここでの重要性は、盛岡市内や以北・沿岸からの患者さんの窓口として、常にトップクラスの医師・スタッフを配置し、迅速かつ的確な検査・診断（トリアージ機能）を行い、高度治療・入院機能を持つ矢巾新病院との密接な連携を図っていくことが非常に重要となります。同センターでは1次救急対応や50床～100床程度の病床を置く計画として現在行政との協議中ではありますが、原則として、内丸では重症例の対応や全身管理を伴う手術は行わない方針に基づき、例えば、院内発症等、緊急時にはすぐに矢巾に搬送する体制整備

●移転配置図



これらの社会状況も踏まえながら、現在、基本計画・基本設計の枠組みを固めている段階ではありますが、今

なお、平成31年度の矢巾新附属病院移転後は、内丸メディカルセンター機能は一時的に既存施設を継続して使うことで計画を進めてまいりますので、引き続き教職員皆様からのご支援とご協力をお願いいたします。

薬学部白衣授与式が行われました

平成26年5月9日(金)矢巾キャンパス大堀記念講堂にて、薬学部5年生131名を対象とした白衣授与式を執り行いました。東北地区における病院・薬局での長期実務実習に臨む学生に、医療人としての心構えを新たにすることを目的とし実施しているもので、今年で4回目となります。

授与式では、前田薬学部長と工藤実務実習部会長より、5月12日から始まる実務実習にあたっての激励のことがありました。

ご父兄や教員が見守る中、教員から学生へ白衣と名札が授与され、5年生を代表して和泉絵理さんが宣誓を行いました。

これから臨床の場に第一歩を踏み出す学生に、大きな期待が寄せられます。

人事担当者として来校し、後輩たちへ所属施設の魅力を伝えていました。



ふれあい看護体験が行われました

5月14日(水)、本学附属病院において「ふれあい看護体験」が行われ、県内の高校生22名が参加しました。この体験は、ナイチンゲールの誕生日である5月12日「看護の日」にちなんで平成4年より毎年行われています。

参加した高校生は、ユニホームに着替えた後、酒井病院長及び及川看護部長より挨拶を受けました。酒井病院長から、「近年の医学の進歩に伴い、看護師が担う役割も高度化している。しかし、患者さんのことを思い寄り添う気持ちが大切であることは、今も昔も変わらない。」と述べられました。その後、それぞれの体験場所へ移動し、患者さんの搬送や誘導、清潔面の援助、車椅子での散歩などを行いました。高校生の中には、将来看護の道を志す方もおり、指導をする先輩看護師に熱い眼差しを向けていました。



薬学部企業研究セミナーが行われました

5月9日(金)、矢巾キャンパスSGL教室において平成26年度企業研究セミナーが開催され、薬学部5・6年生合わせて109名が参加しました。今回は、主に病院薬剤師を志望する学生向けに開催されたもので、県内外の医療機関37施設及びハローワークプラザ盛岡(就活相談コーナー)がブースを設置し、業務内容や福利厚生などの説明を行いました。

また、今回は本学薬学部卒業生6名が各医療機関の

第1回ビブリオ・バトル in 岩手医大が 行われました

5月30日(金)、矢巾キャンパス大堀記念講堂において「第1回ビブリオ・バトル in 岩手医大」が行われました。ビブリオ・バトルとは、「知的書評合戦」とも言われ参加者が自分が選んだ本の魅力をどれだけ聴衆に伝えられるかを対戦形式で競うものです。第1学年の教養科目アカデミックリテラシーの講義の一環として3学部合同で行われ、本に触れる機会を増やすことはもとより、論理的なプレゼンテーションスキルを養うことが期待されています。



対戦の結果は以下のとおりとなりました。

- ▶チャンプ
医学部 青山掌太郎さん
『バイバイ、ブラックバード』(伊坂幸太郎・著)
- ▶準チャンプ
医学部 澤田幸介さん
『ジョッキー』(松樹剛史・著)
- ▶図書館長特別賞
薬学部 八重樫真結さん
『明日から「朝型人間」になる!』(美波紀子・著)

【ビブリオ・バトル公式ルール】

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に一人5分間で本を紹介する。
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか?」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

岩手医科大学募金状況報告 ～皆様のご厚志により支えられています～

【総合移転整備事業募金】

平成21年6月から始めました岩手医科大学総合移転整備事業募金に対し、格別のご理解とご支援を賜りました皆様方お一人おひとりに、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

皆様のご厚志は、大学発展の大きな原動力となるものであり、本事業の早期達成のため有効に活用させていただいております。

今後とも関係各方面からの格別なるご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

今回は27回目のご芳名紹介です。

(平成26年3月1日～平成26年4月30日)

※ご芳名及び寄付金額は、掲載を希望されない方については掲載しておりません。

●会社・法人等(敬称略)

<2,000,000円> 協栄テックス株式会社(岩手県)

<500,000円> 株式会社岡村製作所北東北支店(岩手県)

<ご芳名のみ記載> 丸木医科器械株式会社(宮城県)

●個人等(敬称略)

<ご芳名のみ記載> 西川 喜四雄(在学生父母)

これまでの募金累計額	区 分	申込件数	募金金額(円)
	圭陵会	486	414,372,000
	在学生父母	196	174,190,000
	役員・名誉教授	41	72,910,000
	教職員	124	20,485,000
	在学生	1	100,000
	一 般	131	440,842,922
	計	979	1,122,899,922

(平成26年4月30日現在)

平成26年度予算

【予算編成にあたって】

『誠の人間を育成する』という本学の目的に鑑み、教育・研究・医療のさらなる活性化と質的向上を目指します。そのためには財政面において効率的な収支の均衡を図るとともに資金確保に努め、財政基盤の強化に取り組んでいかなければなりません。

大学経営を安定・維持するためには入学定員充足が不可欠であり、医学部・歯学部・薬学部ともその特性を活かし、また、本学の特色である三学部連携による教育・研究を推進し、総合医療人の育成に向けた魅力ある大学創りを実践することにより、学生を確保していかなければなりません。

事業計画予算は、病院移転整備事業の設計費やエネルギーセンター建設費、日赤岩手乳児院・日赤岩手県支部の土地取得費など、総合移転整備事業の推進が主なものとなっています。この他にも、医療専門学校歯科技工学科の移設工事費などを計上しました。

病院移転事業には多額の資金を必要とするため、事業資金計画に基づいた資金の確保に努めなければなりません。特に、当年度予算において帰属収入の66.2%を占める医療収入については、地域医療連携体制整備の推進により患者確保に努めるなど、大学附属病院全体の増収を図らなければなりません。また、消費税増税などにより価格が上昇する中、財政への影響を考慮しなければなりません。

予算編成にあたっては、総合移転整備事業を見据え、収入については、医療収入などの増収に努めるとともに、補助金や研究費などの外部資金の積極的な獲得を図り、また、支出については、教育・研究・医療活動を円滑に遂行できるよう配慮し、可能な限り圧縮したものとしました。

【主な予算項目】

平成26年度消費収支予算の主な項目について説明します。

収入予算は、学生生徒等納付金83億8,042万円（帰属収入に占める割合16.4%）、医療収入339億4,025万円（同66.2%）、補助金44億9,698万円（同8.8%）を計上しました。これら3項目で帰属収入の91.4%を占めています。

その他の収入は44億2,735万円（同8.6%）を計上し、基本金52億円を組み入れたことにより、消費収入予算総額は460億4,500万円を計上しました。

支出予算では、人件費211億814万円（消費支出に占める割合44.2%）、医療経費（医薬品費、医療材料費、給食材料費）133億3,980万円（同27.9%）、その他の諸経費など132億9,706万円（同27.4%）を計上し、消費支出予算総額は477億4,500万円を計上しました。

消費収入から消費支出を差し引いた消費収支差額は、支出超過（赤字）の△17億円を計上した予算編成となりました。

本学の財政は、帰属収入の66.2%を医療収入に委ねており、支出においては、人件費（44.2%）と医療経費（27.9%）で72.1%を占めています。財政基盤の確立には引き続き医療収入の増収と医療経費の適正・効率化を念頭に入れ、教職員一人ひとりが経費全般の節減に努めていかなければなりません。

1. 学生生徒等納付金

学生生徒等納付金は、授業料、入学金、実験実習費、教育充実費、施設整備費からなっており、医学部44億8,502万円、歯学部19億1,780万円、薬学部18億5,460万円、医療専門学校1億2,300万円、合計83億8,042万円を計上しました。

2. 医療収入

附属病院（医科）、歯科医療センター、循環器医療センター、花巻温泉病院、PET・リニアック先端医療センターを合計した医療収入予算は、入院収入247億5,280万円、外来収入89億1,296万円、その他の医療収入2億7,449万円、合計339億4,025万円を計上しました。

3. 補助金

国庫補助金は、経常費補助金22億3,692万円、その他7億9,318万円、また、地方公共団体補助金は14億6,688万円を計上し、補助金は合計44億9,698万円を計上しました。

4. 人件費

給与・諸手当・所定福利費等の人件費は、社会情勢を考慮し定期昇給分1.75%を見込んで191億1,821万円、また、退職金関係では19億5,907万円を計上して、その他を合わせ人件費は合計211億814万円を計上しました。

5. 医療経費

附属病院全体の医療経費として、医薬品費71億9,662万円（医療経費率21.2%）、医療材料費59億560万円（同17.4%）、給食材料費2億3,758万円（同0.7%）を計上し、医療経費は合計133億3,980万円（同39.3%）を計上しました。

6. 研究費

医学部の講座研究費は、講座等の組織改編に伴い基本額



ロック魂！

中央放射線部(循環器放射線)

上山 悠太

『ロック魂』と言っても音楽の話ではありません(笑)。釣りの話です。震災から3年経ち、『海の復興』も一歩ずつ前進しており、各漁港には釣り人も徐々に戻り始めています。東北地方の三陸沿岸では漁港や磯場でアイナメ、ソイなどの魚をターゲットとしたルアーフィッシングはとても人気の高い釣りです。アイナメ、ソイはこの釣りを愛する人々に通称ロックフィッシュ(根魚)と呼ばれています。これらの魚がロックフィッシュと呼ばれているのは、その名の通り磯のゴツゴツした岩場や漁港の捨石、テトラポットの隙間などを居場所として好んでいるからです。使う道具は専用の竿とリール、そして『ワーム』という合成樹脂やラバーでできた柔らかいルアーを使用します。狙ったポイントにルアーを



投入したら生きた餌のように動かして魚を誘います。水中のロックフィッシュは動いているルアーを見て餌と勘違いして食いついてくるわけです。なぜこの釣りの人気が高いのでしょうか？それはおそらくゲーム性の高さだと思います。この釣りではルアー、すなわち疑似餌を使うため、生きた餌に見えるように動かすテクニックが必要です。そのため釣り上げた際の喜びも大きいのです。極端に言えば『釣れた』というより『釣った』という感覚が得られるのです。この感覚こそが私をこの釣りに駆り立てる最大の理由です。キャッチ＆リリースが基本なので環境にも優しい釣りです。生きた餌を触るのが苦手な人でも始めやすい釣り・・・のはずです。最後に、大好きな地元三陸の海が一日でも早い『真の復興』を遂げる事を祈っています。

を調整し、配分額の変更を行いました。歯学部・薬学部・教養教育センターの講座研究費及び個人研究費にあたる特別研究費は、前年度と同額としました。

7. 土地関係

日赤岩手乳児院・日赤岩手支部の土地取得費として、1億5,875万円を計上しました。

8. 施設関係

建物・建物附属設備は、CVCF設備バッテリー更新工事費1,400万円、その他工事費2億8,600万円、合計3億円を計上しました。

建設仮勘定は、病院移転整備事業の設計管理業務委託費7億9,837万円、エネルギーセンター建設工事費2億7,550万円、その他工事費5億8,738万円を計上し、合計16億6,125万円を計上しました。

9. 設備関係

機器備品などの購入予算として、10億1,530万円を計上しました。

平成26年度 資金収支予算書

(単位：千円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
学生生徒等納付金収入	8,380,420	人件費支出	20,380,410
手数料収入	193,000	諸経費支出	22,729,980
医療収入	33,940,250	施設関係支出	2,120,000
寄付金収入	1,810,000	設備関係支出	1,015,300
補助金収入	4,496,980	資産運用支出	4,503,000
資産運用収入	220,210	その他の支出	6,371,870
事業収入	1,461,160	予備費	500,000
雑収入	687,980	資金支出調整勘定	△5,182,840
前受金収入	1,497,670	次年度繰越支払資金	15,158,910
その他の収入	9,537,750		
資金収入調整勘定	△8,628,790		
前年度繰越支払資金	14,000,000		
収入の部合計	67,596,630	支出の部合計	67,596,630

平成26年度 消費収支予算書

(単位：千円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
学生生徒等納付金	8,380,420	人件費	21,108,140
手数料	193,000	医療経費	13,339,800
医療収入	33,940,250	消耗品費	1,016,400
寄付金	1,865,000	光熱水費	1,275,340
補助金	4,496,980	旅費	293,310
資産運用収入	220,210	修繕費	714,990
事業収入	1,461,160	業務委託費	3,803,270
雑収入	687,980	減価償却額	3,454,080
帰属収入合計	51,245,000	その他の諸経費等	2,539,670
基本金組入額合計	△5,200,000	予備費	200,000
消費収入の部合計	46,045,000	消費支出の部合計	47,745,000
当年度消費支出超過額	1,700,000		

※詳細な説明・確認等を希望される方は、財務部経理課(内線3214・3215)まで照会願います。

新入職員研修を受けて



薬剤部薬剤師
今野 雄貴

研修を受けて、社会人、医療人、そして岩手医科大学の職員としての自覚を持ち、過ごしていかなければならないと改めて実感しました。全体のうちのたった一人の行為が、岩手医科大学のイメージ・評価等に影響を与えるため、様々な規則・モラルを遵守し、責任を持ち行動しなければならないと感じました。まずは、身だしなみ、挨拶、言葉遣い等のマナーから気を付けていきたいと思います。初めは、分からないことも多々あると思うので、自分で判断して行動するのではなく、報告・連絡・相談を必ず行い、社会人としてのマナーや、医療人として医療安全に努めていきたいと思います。

学生時代は、講義等のカリキュラムが組まれており、受動的な立場で学ぶことがほとんどでしたが、今後は自主性や能動的な行動をすることを心掛け、多くの知識を身に付けていきたいと思います。精神面については、研修で「失敗や反省は成長のサイクル」とあったように、失敗等をした場合でも次への対策や課題、改善点を考え、成長できるようにしていきたいと思います。失敗等で落ち込んでいるばかりではなく、糧にして前進していけるようにしていきたいです。

岩手医科大学の一員として、教育・医療・研究に貢献できるよう、自己研鑽に努めていきたいと思います。



中7階看護師
触沢 梢

新人教育研修を受け、岩手医科大学の目指すもの、そして自分もそのチームの一人として医療、看護の提供に関わっていく重要性和責任を再確認しました。岩手医科大学は県内唯一の特定機能病院として高度医療の提供や救急医療の充実を図っています。同時に教育にも力を入れており、先進する医療を生涯を通して学ぶことがより良い看護を提供することに繋がるのだと学びました。さらに問題点にはPDCAサイクルを活用し、計画・実施・評価・見直しを行いチームで共有することで改善と質の向上を目指していると知りました。

質の高い看護を提供するためには、チーム全体が高い目標を持ちそれぞれがスキルアップしていくことが大切であると考えます。新人であっても患者さんは一人の看護師としてみえています。学生の頃と違い、自分の行動には社会的責任が伴います。そのためにも誠意を持って真摯に患者さんと関わることが大切だと学びました。

失敗したり、慣れない業務に苦戦したり、今後たくさんの壁を乗り越えていかなければなりません。しかし岩手医科大学のチームの一員としてより質の高い看護を提供していけるよう向上心を持って努力していきたいと思います。上司や先輩の方々の教を素直に受け止め、「なぜ、どうして」という追求心と探求心を持って学んでいきたいと思います。



企画調整課事務員
山形 周平

研修会に参加し感じたことは、岩手医科大学の社会に与える影響の大きさでした。県内の自治体に匹敵するほどの予算規模であり、一日に千人以上が出入りする東北・北海道において最大の病院であることから改めて地域社会に与える影響の大きさを確認しました。個人の評価は大学の評価になりえます。そのため、社会の信用を失う行為は、個人の責任にとどまらず、大学の信用を傷つけてしまうことを忘れてはいけなかったと思います。一方で、個人として信用を築くことができれば、大学の評価、信頼につながると 생각합니다。社会人として、岩手医科大学の一員としての自覚を持ち、明るい挨拶や患者さんとの接し方など自分にできることを確実に行っていきます。

岩手医科大学の理念は「医療人である前に、誠の人間たれ」です。人間性の向上は、教育・研究・医療を行う岩手医科大学を支える立場である事務員にも求められているように思います。上司・先輩方からたくさんのことを学び、自己の成長につなげられるよう努めていきたいと思います。

「自分の持っているちからで精一杯のサービスを心掛けてほしい、失敗は勉強であるから何事にも前向きに取り組んでほしい」との訓示を忘れず、岩手医科大学の一員として社会に貢献できるよう日々励んでいきたいと思います。

最後になりましたが、今回新人職員教育研修会を開催してくださいました多くの職員の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

医学部5年生4名が第111回日本内科学会総会サテライトシンポジウムで 優秀演題賞を受賞しました 伊藤准教授が指導教官賞を受賞しました



4月12日、第111回日本内科学会総会サテライトシンポジウム「研修医、医学生のための内科学会」で、本学医学部5年生の飯田貴之くん、高橋今日子さん、中村秀樹くん、谷村史人くんの4名で研究したテーマが、優秀演題賞を受賞しました。学会として一昨年から2回目の試みで、今回は全国から2076演題がありました。応募者のほとんどは研修医で、前回と同様、学生はわずかでした。

本学学生が入ったセッションは、他の演者はすべて研修医というグループで、6つの演題で構成されておりました。発表は落ち着いたもので、質疑応答も、臆することなくすべて原稿なしで学生が応答することができました。発表質疑応答の後、座長からの採点を受けて、研修医の発表を抑えて1位に選ばれて、最後の表彰式で優秀演題30演題に選出されました。

彼らの研究テーマは、昨年医学部4年生で実施したラボ配属で行った研究内容です。演題は、「当センターでの左主幹部急性冠症候群の院内転帰の調査—新たな予後予測リスクスコア開発の試み—」です。左主幹部を責任病変とする急性冠症候群は予後不良の疾患で、これまでの死亡リスク評価では、予測不十分であることを明らかにして、臨床所見と詳細な心電図解析からまったく独自の予後予測スコアを



開発しました。これは、きわめてオリジナリティの高い研究で、彼らが実習期間だけでなく、日夜研究を重ねた賜物です。併せて、小生にも「サテライトシンポジウム指導教官賞」を授与していただきました。これはひとえに学生諸君のおかげです。

最後になりましたが、学生の演題発表にあたり、ご協力いただきましたご父兄のみなさま、秀逸なポスター作製にご協力いただいた画像センターのスタッフの方々、またご助言・多大な援助をいただきました内科学講座（循環器内科分野）森野禎浩教授・当講座秘書の方々にも謝意を申し上げます。

(内科学講座循環器内科分野 伊藤 智範)

中7階看護師5名が日本看護学会優秀発表賞を受賞しました

中7階看護師の澁谷幸子、相内亜美、佐藤実緒、植木葉子、佐藤真結美は、平成25年11月15日から2日間にわたり、福井県で開催された第44回日本看護学会 - 地域看護・学術集会において、日本看護学会優秀発表賞を受賞しました。受賞演題は「多発性骨髄腫患者の骨病変に関する知識と対処行動の現状調査」で、血液疾患でも病態が理解されにくい疾患であり、自覚症状出現から患者の対処行



動について調査した内容でした。患者は痛みを自覚し、多発性骨髄腫と診断された後も骨折の恐怖や不安のため誤った対処行動を行っており、日常生活に支障を感じていることがわかりました。今後は、医師や理学療法士と連携した「患者・家族会」の開催により、退院後も安心した療養生活を送ることができるように支えていきたいと考えています。

(中7階主任看護師 澁谷 幸子)

三大陸から集結した 卒業生の子女の皆さんをお迎えして

平成26年5月2日に、岩手醫學専門学校第14期卒業生(1945年卒)「徐 寶黎」(Hsu Pao Li)氏の一周忌に際して、アジア、ヨーロッパ、アメリカの3大陸に居住されているご令嬢様5名と従妹2名の計7名のみなさんが日本に集結し、御父上の母校である本学を訪問されました。

徐さんご家族から、附属病院に対し、亡くなられた御父上から50万円、今回来訪がかなわなかったご令室様より50万円、計100万円の寄付金の申し出があり、病院長の代理として千葉病院事務部次長が御礼と感謝を申し上げます。当日、

午前中は御父上の在学中のまま残存している歴史ある内丸キャンパスを、午後は矢巾キャンパスおよびドクターヘリポートを見学しました。そして、翌日は小岩井農場の満開の一本桜など盛岡近郊を観光し盛岡の春を満喫され、それぞれ帰国の途につきました。

その後ドイツ在住の長女クリスチーナさんから『今回の貴学訪問では長年にわたる多くの先人の努力の跡を感じました。岩手医科大学と附属病院が将来にわたって飛躍し続けることを願っております。お会いした皆様なら必ずや成し遂げられると信じています。』と書かれたお礼のメールが届きました。

本学卒業生は日本国内にとどまらず世界で活躍し、またその子孫も世界のいたるところで本学の更なる飛躍を願っていることを感じました。

(文責：医務課 堀口 真由子)

省エネ推進委員会だより

今般、矢巾キャンパスマルチメディア教育研究棟の竣工等によりエネルギー消費量が増加していること、また、原油価格の高騰や電気料金の引き上げなどによって、本学の光熱費の支出は増加の傾向にあります。

このことから、電力需要が増加する夏季において、次のような節電対策を計画しましたので、無理のない範囲で節電に心掛けて頂くようお願いいたします。

【夏の節電対策】 実践期間：6月1日～8月31日迄

削減目標：期間内の消費電力量(合計値)を前年度比で1%削減

《実践項目》

その1 冷房の設定温度は28℃もしくは弱冷房として下さい。

※なお、病室や診療室、実験室等は、支障のない範囲で設定緩和に努めてください。

その2 不要照明の消灯、休憩時間における照明は消灯しましょう。

その3 不要な医療・研究・事務用機器は電源を切りましょう。

その4 クールビズの実践 ※クールビズは9月末迄

その5 気温上昇に伴いエネルギー消費の増加が見込まれる場合は、館内放送や巡視点検を実施し、節電を要請します。

期間中は、実践状況や学内のエネルギー使用状況の把握のため、施設課並びに省エネ推進委員による定期的な省エネパトロールを予定しています。



岩手医科大学報 第453号

発行年月日 平成26年6月30日

発行者 学長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会
事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111 (内線7023)

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

編集後記

岩手医科大学報は、本号より誌面レイアウトを大幅に改訂いたしました。

総合移転整備計画を含めた創立120周年記念事業という壮大な事業が3年後に控えております。そこで、岩手医科大学報をこれまで以上に、学内はもとより広く学外へ大学の現状や、今後の附属病院移転事業の基本計画についての進捗状況などを発信するものにしたいと思っております。

今年は5年ぶりにエルニーニョ現象の発生予想が出されて冷夏が心配されていますが、大学を取り巻く環境は暑くなっていくのかなと期待しております。

(編集委員 野里 三津子)

《編集委員長より》

本学は現在、矢巾新附属病院・内丸メディカルセンター(仮称)の建設、そして、看護学部の新設(予定)などを包括した創立120周年記念事業を進めておるところです。

120年の歴史の中でも最大の事業であり、教職員の皆様の協力連携体制が非常に重要となります。そこで、岩手医科大学報を教職員の情報共有・発信のツールとして、より一層活用していきたいとの思いより、レイアウトを一新いたしました。積極的なご意見・ご寄稿をお寄せいただきますよう宜しくお願い申し上げます。

岩手医科大学報編集委員長 小川 彰
(理事長・学長)